

前田本色葉字類抄の徳声について

二戸麻砂彦

A Study of the Tone 'Toku-syō' in "Iroha-jiruisyō"

NITO Masahiko

Abstract

Dictionaries in Ancient Japanese have been inflected by Chinese Dictionaries. These are divided into three classes, Bushu (部首: parts of Kanji), Igi (意義: meanings of Kanji) and Jion (字音: readings of Kanji) from the point of view about their search systems. These systems were not fit for Japanese Language. And so, Dictionaries by the use of Iroha (イロハ) search system were composed in late Heian period. "Iroha-jiruisyō" is one of them. This study analyzes the tone 'Toku-syō' (徳声) in "Iroha-jiruisyō".

キーワード: 色葉字類抄、徳声、入声軽、日本漢字音

key words: Iroha-jiruisyō, Toku-syō, Nissyō-karu, Sino-Japanese

- 0 はじめに
- 1 声調における徳声
- 2 前田本色葉字類抄の徳声一覧
- 3 上巻に付載する徳声の分析
- 4 下巻に付載する徳声の分析
- 5 まとめ

0 はじめに

尊経閣文庫蔵本(前田家旧蔵三卷本、前田本と以下略称する)『色葉字類抄』¹⁾は中巻等を欠いているが、世俗および色葉字類抄(字類抄諸本²⁾と総称する)の中核的な一諸本として、重要な位置を占めている。字類抄諸本の編纂初期段階における最大の特徴は、いわゆる「色葉和名」という基準に基づく和訓語彙の蒐集にある。さらなる利便性の高い要求があったのであろう、増補改訂段階になると、和訓の確認とともに、より多くの掲出字の字音を求める場面もあったはずである。それに応えて、増補改訂の早い段階における字音の把握は反切・同音字注を用いたと推測する。しかし、字音語の充実という観点から、仮名音注の増補に踏み切ったと想定できる。これは増補改訂の後段に当たると考えられる。実用的な字音把握を可能とするため、より日本語に馴化した仮名のレベルによる標音を目指したわけである。このような仮名音注の増補と並行的に当該字の声調を声点によって明示することも行われた。その声調体系は四声(平・上・去・入)を基本としているようであるが、東声(平声軽)と徳声(入声軽)と認められる諸例がある。本稿では徳声に関わる分析を試みたい。

1 声調における徳声

日本語史において、中国語音を移入し馴化・定着させることは多くの困難をともなった。何より、それぞれの音節構造に相当な違いがある。中国語は下記のような単音節構造IMVF/Tを特徴とする。こ

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

れに対して、日本語は開音節CV（子音 consonant + 母音 vowel）であり、単純な移入を許さない。加えて、同じ高低アクセント（pitch accent）でありながらも、単音節全体を覆う声調の学習には、かなりの労力を必要とした。そのためか、いわゆる呉音の声調においては、四声が知識的な学習対象とされずに伝承し、いわゆる漢音の声調体系を持ちこむことにより、字音の把握を再度し直したのではないかと想定している。これまでの研究成果を集約しながら、いわゆる呉音と漢音それぞれの声調に関する日本漢字音の状況をまとめておく。

I	Initial	頭子音	声母
M	Medial	介音(韻頭)	韻母
V	Principal Vowel	主母音(韻腹)	
F	Final	末子音(韻尾)	
T	Tone	声調	

いわゆる日本呉音の声調を示す文献は平安時代後期以降のもの（大般若経読誦資料、法華経読誦資料、類聚名義抄の和音など）しか見出すことができないため、反映する呉音の声調は日本語に馴化した状態であることが考えられる。その点を考慮しながら、すでに重要な研究が公にされた。まず、類聚名義抄における和音・呉音の声調表示を集約すれば、次のような結論を得ることが指摘（これを要するに、類聚名義抄で「和音」「呉音」と示された漢字音において、少なくともその声調体系は共に等しく上声文字群の存在しない三声体系であったと考えられるのである。）³⁾ されている。法華経音読においても、この指摘は基本的に適用⁴⁾ される。また別の分析で言えば、日本呉音の声調において「上声」と「去声」とはallotonesの関係にあった。さらに注目すべき指摘（「東声」「徳声」は卓立協調の音調を表すために用いられ、日本呉音の「字音」としての声調ではなかった）⁵⁾ も示されている。

いわゆる日本漢音の声調については六声体系を基本とする。中古音の調類である四声（平・上・去・入）は日本漢音においても平・上・去・入として対応する。ただし、平声と入声はそれぞれ二種類に下位区分される。これを「軽」と「重」という用語で区別する。その中でも、平声軽は東声、入声軽は徳声と称する。また、中国語音韻史上の中古音が示す頭子音（声母）の清濁によって、東声と平声および徳声と入声が識別される。以下に、まとめと置く。⁶⁾ なお、切韻を撰述して以降の中国語では、上声濁が次第に去声化を起こした状態を示す。以下の網掛部分であり、その移行過程を日本漢音が反映している。

	清	次清	清濁	濁
平声	平声軽 (東声)		平声重 (平声)	
上声	上声			
去声	去声			
入声	入声軽 (徳声)			入声重 (入声)

この日本漢音における六声体系が示す調類は次のような調値であったと考えられる。なお、●は高いモーラ、○は低いモーラであることを示す。また、括弧内は一音節（一字仮名）の場合を、▶と▷は入声の末子音（韻尾）を指す。日本語への移入と馴化の過程で、音節あるいはモーラの相対的な高低で把握されたことになる。なかでも、徳声の調値は短促を特徴とした閉音節（1音節）の高平調、あるいは開音節化した2モーラの高平調〔上上〕と推定⁷⁾ されている。

平声重	=○○	低平調 (○)
平声軽 (東声)	=●○	下降調 (◐)
上声	=●●	高平調 (●)
去声	=○●	上昇調 (◑)
入声重	=○▷	低平調
入声軽 (徳声)	=●▶	高平調

2 前田本色葉字類抄の徳声一覧

活字媒体や情報機器等において漢字を表示する場合、原則的には正方形を意識しながら作成されている。これは手書きによる長い書写の歴史を踏まえてのことと認められる。字画数が多く、また複雑な字形であっても、正方形に収めようとする傾向に変わりはない。ただし、手書きによる個別の字形においては縦長になるなど、結果として正方形にならない場合も想定できる。その場合、声点を差す位置の認定に困難を伴うことがある。入声であるのか、徳声であるのか、恣意的にならないよう分析しなければならない。

以下、前田本色葉字類抄における徳声の所載例を掲げる。上巻は【表1】として、下巻は【表2】として集約した。表の構成を示しておく。なお、当該の所載例と同音の諸例も掲げた。

番号 → 前田本色葉字類抄において、音注（反切・同音字注・仮名音注・声点）を含む当該の掲出字それぞれに通し番号を付した。この中から、徳声の諸例および同音の諸例を集約している。

* 熟字の場合、a（第1字） b（第2字） c（第3字） d（第4字）を加えた。

所在 → 巻、篇、帖数、表裏、行数、部の順。

* 篇はイロハ順、部は意義分類を指す。

掲出字 → 見出し語。単字および熟字（二字以上）。

* JIS外漢字は「部首+諧声符」のように表示した。⁸⁾

右注 → 双行または三行による割注の右を右注と略す。

中注 → 三行割注の中央を中注と略す。付注頻度は低い。

左注 → 双行または三行による割注の左を左注と略す。

右傍 → 掲出字の右側を右傍と略す。

左傍 → 掲出字の左側を左傍と略す。

中古音 → 三根谷説⁹⁾による中国語音韻史上における中古漢語の推定音。

韻目 → 切韻系韻書による所属韻。

【表1】

番号	前田本所在	掲出字		仮名音注		中古音	韻目
0894b	上波・033ウ6・疊字	峽	徳?	カフ	右注	yep	洽韻
2429	上加・091ウ2・地儀	峽	入	カフ	右傍	yep	洽韻
4483b	下佐・044オ3・動物	峽	入	カウ	右傍	yep	洽韻
3011a	上加・108ウ4・疊字	洽	入	カフ	左注	yep	洽韻
1461	上度・056オ6・人體	疫	徳?	エキ	右傍	jiuek	昔韻
1462				ヤク	右注		
3767	下江・015オ6・人躰	疫	入	エキ	右傍	jiuek	昔韻
3768				ヤク	右注		
3857b	下江・017ウ4・疊字	役	入	ヤク	左注	jiuek	昔韻
1460a	上度・056オ6・人體	雀	徳	シヤク	右傍	tsiak	藥韻
5849a	下師・085オ1・疊字	雀	徳	シヤク	右注	tsiak	藥韻
5741a	下師・083オ6・疊字	雀	徳	シヤク	右注	tsiak	藥韻
5842a	下師・084ウ7・疊字	雀	入	シヤク	右傍	tsiak	藥韻
6805a	下洲・114オ6・動物	雀	徳	—	—	tsiak	藥韻
3829b	下江・017オ6・疊字	爵	入	シヤク	右傍	tsiak	藥韻
5998b	下會・089オ7・疊字	爵	入	—	—	tsiak	藥韻
3140b	上加・110ウ6・疊字	口+雀	徳	シヤク	右傍	tsiak	藥韻

【表2】

番号	前田本所在	掲出字		仮名音注		中古音	韻目
3721b	下古・012オ6・疊字	壁	徳	ヘキ	右注	pek	錫韻
2440	上加・091ウ6・地儀	壁	入	ヘキ	右傍	pek	錫韻
2868b	上加・106ウ4・疊字	壁	入	ヘキ	左注	pek	錫韻
5474b	下師・075オ3・光彩	壁	徳	ヘキ	右傍	pek	錫韻
4452b	下佐・043オ2・地儀	璧	徳	ヘキ	右傍	piek	昔韻
6011b	下會・089ウ3・疊字	璧	徳	ヘキ	左注	piek	昔韻
1378a	上邊・053オ6・疊字	辟	入	ヘキ	左注	piek	昔韻
6186a	下飛・095オ2・雜物	襞	入	ヘキ	右傍	piek	昔韻
3782	下江・016オ1・雜物	杙	徳	ハツ	右傍	pet	黠韻

番号	前田本所在	掲出字		仮名音注		中古音	韻目
0749a	上波・031 ウ5・疊字	八	入	ハツ	左注	pet	黠韻
0750a	上波・031 ウ5・疊字	八	入	ハツ	右注	pet	黠韻
0836a	上波・033 オ2・疊字	八	入	ハチ	右注	pet	黠韻
0837a	上波・033 オ2・疊字	八	入	—	—	pet	黠韻
0849a	上波・033 オ4・疊字	八	入	ハツ	左注	pet	黠韻
0887a	上波・033 ウ5・疊字	八	入	ハツ	右注	pet	黠韻
0896a	上波・033 ウ7・疊字	八	入	ハツ	左注	pet	黠韻
3413c	下古・006 オ4・人事	八	入	—	—	pet	黠韻
5424b	下師・074 オ1・雑物	八	入	ハチ	右注	pet	黠韻
4854	下木・056 オ2・植物	稊	徳?	シキツ	右傍	dziuet	術韻
0861b	上波・033 オ7・疊字	術	入濁	—	—	dziuet	術韻
1943b	上池・071 オ2・疊字	術	入濁	シュツ	右注	dziuet	術韻
3808b	下江・017 オ2・疊字	術	入	スキツ	左注	dziuet	術韻
2211	上遠・080 オ5・植物	朮	入	クキツ	右傍	dziuet	術韻
4904a	下木・058 オ1・人事	玉	徳	—	—	ɲiauk	燭韻
0583a	上波・024 オ2・人躰	玉	入濁	—	—	ɲiauk	燭韻
0840b	上波・033 オ2・疊字	玉	入濁	キヨク	中注	ɲiauk	燭韻
6035	下飛・090 ウ6・地儀	獄	入濁	コク	右傍	ɲiauk	燭韻
4906a	下木・058 オ3・飲食	黒	徳?	—	—	xɬk	徳韻
0596a	上波・024 オ7・人躰	黒	入	コク	右傍	xɬk	徳韻
0679a	上波・027 オ6・雑物	黒	入	コク	右傍	xɬk	徳韻
3667a	下古・011 ウ1・疊字	黒	入	—	—	xɬk	徳韻
3671a	下古・011 ウ2・疊字	黒	入	—	—	xɬk	徳韻
4913	下木・058 オ6・雑物	襍	徳?	ハク	右傍	pak	鐸韻
0758a	上波・031 ウ7・疊字	博	入	ハク	左注	pak	鐸韻
0768a	上波・032 オ2・疊字	博	入濁	ハン	右注	pak	鐸韻
0819a	上波・032 ウ5・疊字	博	入	ハク	中注	pak	鐸韻
0821a	上波・032 ウ6・疊字	博	入	ハク	左注	pak	鐸韻
0822a	上波・032 ウ6・疊字	博	入	ハク	左注	pak	鐸韻
0823a	上波・032 ウ6・疊字	博	入	ハク	左注	pak	鐸韻

番号	前田本所在	掲出字		仮名音注		中古音	韻目
0850a	上波・033 オ4・疊字	博	入濁	ハク	左注	pak	鐸韻
0877a	上波・033 ウ3・疊字	博	入	ハク	右注	pak	鐸韻
4774b	下佐・053 オ3・疊字	博	入濁	ハク	左注	pak	鐸韻
4594	下佐・047 ウ6・雑物	罇	入	ハク	右注	pak	鐸韻
0635a	上波・026 オ2・飲食	罇	入	ハク	右傍	pak	鐸韻
5471a	下師・074 ウ7・雑物	肅	徳	シク	右傍	siuk	屋韻
5589a	下師・080 ウ3・疊字	夙	徳	シク	左注	siuk	屋韻
1949b	上池・071 オ3・疊字	肅	入	シク	右注	siuk	屋韻
2102b	上利・075 ウ1・疊字	宿	入	シユク	左注	siuk	屋韻
5614a	下師・081 オ4・疊字	宿	入	—	—	siuk	屋韻
5666a	下師・082 オ2・疊字	宿	入	—	—	siuk	屋韻
5544b	下師・079 オ3・疊字	絶	徳?	—	—	dziuat	薛韻
4380b	下阿・039 ウ2・疊字	絶	入	セツ	左注	dziuat	薛韻
6468b	下毛・105 ウ3・疊字	絶	入	セツ	左注	dziuat	薛韻
6588a	下世・110 オ5・疊字	絶	入	セチ	左注	dziuat	薛韻
6683a	下世・111 ウ1・疊字	絶	入	セチ	左注	dziuat	薛韻
6736a	下世・112 オ4・疊字	絶	入	セツ	右注	dziuat	薛韻
6737a	下世・112 オ4・疊字	絶	入	セツ	右注	dziuat	薛韻
5809b	下師・084 ウ2・疊字	澁	徳?	シフ	右注	šiep	緝韻
5382a	下師・073 オ2・人事	澁	入	シフ	中注	šiep	緝韻
5851b	下師・085 オ1・疊字	白	徳?	ハク	右傍	bak	陌韻
0633a	上波・025 ウ6・人事	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0689a	上波・027 ウ4・雑物	白	入	ハク	右注	bak	陌韻
0723a	上波・031 オ7・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0724a	上波・031 オ7・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0726a	上波・031 オ7・疊字	白	入	ハク	右注	bak	陌韻
0730a	上波・031 ウ1・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0742a	上波・031 ウ4・疊字	白	入	ハク	中注	bak	陌韻
0751a	上波・031 ウ5・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0770a	上波・032 オ2・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻

番号	前田本所在	掲出字		仮名音注		中古音	韻目
0779a	上波・032 オ4・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0796a	上波・032 ウ1・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0817a	上波・032 ウ5・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0834a	上波・033 オ1・疊字	白	入	ハク	中注	bak	陌韻
0840a	上波・033 オ2・疊字	白	入	ハク	中注	bak	陌韻
0890a	上波・033 ウ5・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0892a	上波・033 ウ6・疊字	白	入	ハク	右注	bak	陌韻
0893a	上波・033 ウ6・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0895a	上波・033 ウ6・疊字	白	入	ハク	左注	bak	陌韻
0898a	上波・033 ウ7・疊字	白	入	ハク	右注	bak	陌韻
1403b	上邊・053 ウ5・疊字	白	入	ヒヤク	右注	bak	陌韻
4240a	下阿・031 ウ2・飲食	白	入	—	—	bak	陌韻
5109b	下木・063 オ4・疊字	白	入	—	—	bak	陌韻
5284a	下師・069 ウ2・植物	白	入	—	—	bak	陌韻
6062a	下飛・091 ウ1・植物	白	入濁	ヒヤク	右注	bak	陌韻
6201a	下飛・095 オ5・光彩	白	入濁	ヒヤク	右傍	bak	陌韻
6241a	下飛・097 ウ6・疊字	白	入濁	ヒヤク	左注	bak	陌韻
6246a	下飛・097 ウ7・疊字	白	入	—	—	bak	陌韻
6758d	下世・112 ウ2・疊字	白	入	ハク	右傍	bak	陌韻
0657	上波・026 ウ3・雑物	帛	入	ハク	右傍	bak	陌韻
1896b	上池・070 オ6・疊字	帛	入	ハク	右注	bak	陌韻
3006b	上加・108 ウ3・疊字	帛	入	ハク	左注	bak	陌韻
5313a	下師・070 ウ1・動物	鮪	入	—	—	bak	陌韻
6116a	下飛・093 オ1・人躰	食	徳?	シヨク	右傍	dziek	職韻
1010b	上仁・040 オ7・疊字	食	入濁	シキ	中注	dziek	職韻
4672b	下佐・051 オ7・疊字	食	入	シキ	中注	dziek	職韻
4747b	下佐・052 ウ3・疊字	食	入	シキ	左注	dziek	職韻
6306b	下飛・098 ウ3・疊字	食	入	シヨク	左注	dziek	職韻

3 上巻に付載する徳声の分析

前田本色葉字類抄上巻に見出す徳声の諸例は前節【表1】に集約した。それらについて個々に分析を試みる。なお、掲出字の中古音が示す調類は〔 〕で、それに対する日本漢字音の調値は〔 〕で表す。

0894b「峽」では徳声の位置に差したように見える朱点が存在する。当該字は最終第九画が右下に向けて筆写されるが、払いの字形ではなく、止めのようにになっている。そのため、止めの先端部分に差声すると、四隅右下の入声位置から外れると認識した可能性がある。すぐには徳声と断定しにくい。なお、当該例は熟字「巴峽〔平徳〕」として掲出され、右注「ハカフ」という仮名音注を付す。この「巴峽」は中国湖西省巴東県の西にある峽谷名で、長江に臨む急流の難所として有名。前田本の左注には「猿名」とあるから、巴峽の兩岸に棲息する「巴猿」を指す。いわゆる呉音では「ヘゲフ」いわゆる漢音は「ハカフ」と想定する。その漢音において、徳声の調値は短促を特徴とした閉音節（1音節）の高平調、あるいは開音節化した2モーラの高平調〔高高〕と推定⁶⁾されているから、当該の熟字は〔低高高〕のように把握していたことになる。ただし、漢音の声調については、中古音が示す頭子音(声母)の清濁によって徳声と入声とが識別される。徳声(入声軽)は「清・次清・清濁」に、入声(入声重)は「濁」に対応する。当該字「峽」の中古音 **yep** は等韻学の術語で言う匣母濁洽韻二等であるから、徳声ではなく入声と認められる。また、単字例である2429「峽」も入声に差している。この「峽」と同音字である3011a「洽」は熟字「洽聞〔入去〕」として掲出しており、これも「入声」である。よって、先に述べた書写の環境をも考慮した上で、当該字「峽」は入声と認めておきたい。

1461「疫」も徳声の位置らしき朱点がある。最終第九画の払いが右下をはみ出る字形として筆写されたため、入声の位置に差しにくく、右下よりは少し上方に差声したとも考えられる。当該字には右傍「エキ」右注「ヤク俗」とあり、いわゆる漢音と呉音との二音を並列して示す。しかし、3767「疫」は入声例である。3857b「役」は同音の例でありながら、明らかに入声を差している。傍証として観智院本類聚名義抄¹⁰⁾を参照すると、入声の朱点を差した同音字注「音役」を見出す。よって、1461「疫」は入声例としておきたい。

疫 … 又以睡反／音役〔入〕エヤミ 一云トキノチ／和ヤク キヤク

(観智院本類聚名義抄／法下116-6)

役 惟豎反 和音 キヤウ 又ヤク ツカフ／ツラナル …

(観智院本類聚名義抄／佛上029-7)

1460a「雀」は徳声の差された例である。当該例は熟字「雀盲〔徳□¹¹⁾〕」として掲出されている。下巻の5849a・5741a・6805a「雀」にも徳声を見出すが、5842a「雀頭〔入平〕」は入声の例である。当該字「雀」の中古音 **tsiak** は精母清藥韻四等であるから、いわゆる漢音の声調では徳声と認められる。漢音資料を代表する長承本蒙求¹²⁾には徳声を差した例があり、その証左と言えよう。3140b「口+雀(=嚙)」も加えて、これらを以下に纏める。

楊〔平〕寶〔上〕黄〔平〕雀〔徳〕シヤク

(長承本蒙求／066)

雀盲〔徳□〕〔高高□□〕シヤク□□ (右傍の仮名音注)

雀環〔徳平〕〔高高低低〕シヤククワン (右注の仮名音注)

雀羅〔徳平〕〔高高低〕シヤクラ (右注の仮名音注)

雀頭〔入平〕〔低低低低〕シヤクトウ (右傍の仮名音注)

雀鷓〔徳平〕〔高高低低〕□□□エウ (右傍の仮名音注)

咀嚼〔去徳〕〔低高高高〕シヨシヤク (右傍の仮名音注)

ただし、当該字「雀」と同音の3829b・5998b「爵」については入声を差している。観智院本類聚名

義抄も「爵」は入声を示している。

雀 音爵 ス、メ (ミ：右傍) (平平上)	(観智院本類聚名義抄／僧中 136-5)
爵 音雀 [入] ツカサ [上□□] …	(観智院本類聚名義抄／僧中 006-3)
嚼 <u>□+雀</u> 二今 在爵反 カム クラフ／… 和者ク	(観智院本類聚名義抄／佛中 055-3)

前田本色葉字類抄上巻の状況を集約すれば、熟字「雀盲・雀環・雀羅・雀鶴」の「雀」に差された四例、および「□+雀 (=嚼)」一例、あわせて五例を徳声と認定できる。

4 下巻に付載する徳声の分析

前田本色葉字類抄下巻に見出す徳声の諸例は前々節【表2】に集約した。それらについて個々に分析を試みる。

3721b「壁」は徳声を差した例である。その部首「土」の第四画右側に徳声を付している。当該例は熟字「居壁 [□徳]」として掲出され、右注「コヘキ」という仮名音注を付す。いわゆる漢音ならば仮名音注「キヨヘキ」を、いわゆる呉音ならば「コヒヤク」を想定したいところであるが、両者の混在した字音形「コヘキ」となっている。熟字の上字「居」には声点を差していないので、日本漢字音における調値は〔□高高〕と考えておく。5474b「壁」も徳声を差した例で、熟字「粉壁 [上徳]」として掲出されている。右傍には仮名音注「フンヘキ」を付しているから、その調値は〔高高高高〕となる。しかし、当該字「壁」は2440・2868bにも見出され、いずれも入声を差している。漢音資料を代表する長承本蒙求には徳声を差した諸例がある。観智院本類聚名義抄は墨点で入声濁を付す。よって、当該字「壁」は徳声か入声かで揺れがあると認める。次に掲げる徳声例「壁」と字形上の混同をした可能性もあるだろう。

鑿 [入] サク 壁 [徳] ヘキ	(長承本蒙求／003)
連 [平] レヽ 壁 [徳] ヘキ	(長承本蒙求／011)
桂 [去] ケイ 壁 [徳] ヘキ	(長承本蒙求／147)
壁 音辟 [入濁：墨点] ヘキ カヘ [上上] カキ／ソコ [上上]	(観智院本類聚名義抄／法中 049-8)

4452b・6011b「壁」にも徳声を見出す。それぞれ熟字「藻壁門 [上徳□]」「圓壁 [平徳]」として掲出されており、仮名音注「サウヘキ」「エンヘキ」を付す。その調値は〔高高高高□□〕〔低低高高〕と想定できる。同音の例である1378a「辟」6186a「壁」は入声を差している。長承本蒙求では「壁」に徳声を差した諸例がある。観智院本類聚名義抄にも正音の同音字注に徳声が見つかる。当該字「壁」は徳声である蓋然性が高い。

毀 [上] 鬼反 壁 [徳] ヘキ	(長承本蒙求／040)
謝 [去] シヤ 壁 [徳] ケキ・ヘキ	(長承本蒙求／094)
壁 音璧 [徳] ヘキ タマ／和 ヒヤク ヘキ	(観智院本類聚名義抄／法中 020-3)
辟 ハリ [上平] … 和 ヒ(ヽ)ヤク	(観智院本類聚名義抄／僧下 066-5)
壁積 辟 [入] 積二音 ヒタメ [平平濁平] 上コロモ／ヒタメ	(観智院本類聚名義抄／法中 148-7)

3782「杙」は単字で徳声を見出す。右注に「音八」左注に「又音拜」を、右傍に仮名音注「ハツ」を付す。当該字と同音「八」の諸例0749a・0750a・0836a・0837a・0849a・0887a・0896a・3413c・5428bは入声を差す。これらに付載された仮名音注は、いわゆる漢音「ハツ」が多い中で、いわゆる呉音「ハチ」を0836aに見つける。長承本蒙求では「八」に徳声を付す。観智院本類聚名義抄は和音「ハチ」がある。

当該字「机」は孤例ではあるが、徳声の蓋然性が高い。

八 [徳] ハウ 僞 [去] 春反 ス> シユヾ	(長承本蒙求/053)
八 [徳] 龍 [平]	(長承本蒙求/139)
八 [徳] ハチ 斗 [上] トウ	(長承本蒙求/096)
八 博拔反 ヤツ/和ハチ	(観智院本類聚名義抄/佛下末026-7)

4845「机」も単字で徳声を差し、その右傍には仮名音注「シキツ」を付す。前述したように、いわゆる漢音の声調においては、中古音が示す頭子音の清濁によって徳声と入声識別される。徳声(入声軽)は「清・次清・清濁」に、入声(入声重)は「濁」に対応する。当該字「机」の中古音 *dziuet* は等韻学の術語で言う牀母濁術韻三等であるから、徳声ではなく入声を期待する。同音の諸例である 0861b・1943b「術」には入声濁を、3803b「術」2211「机」には入声を差している。長承本蒙求では同音字「述」に入声を付す。入声を差した観智院本類聚名義抄の正音注「述」も考慮に入れると、当該字「机」に徳声を差したことは疑義が残る。

王 [平] 述 [入] スツ	(長承本蒙求/147)
術 述音 [入] ノリ/ミチ [上上] タノシ …	(観智院本類聚名義抄/佛上043-3)
机 時律反 ヲケラ [上上平] …/禾+犬字也 直律反 述	(観智院本類聚名義抄/佛下本115-2)
机 音述	(観智院本類聚名義抄/法下013-7)

4909a「玉」は五字熟字「玉樹後庭花」として掲出され、徳声を差している。0583a・0840a「玉」には入声濁を付す。同音字である 6035「獄」にも入声濁を見出す。中古音 *njauk* は疑母清濁燭韻三等であり、いわゆる漢音の声調では徳声と把握していた蓋然性が高い。長承本蒙求の諸例が徳声を差しており、傍証となる。一方で、観智院本類聚名義抄における当該字「玉」は入声濁を差している。興味深いのは、入声濁と徳声濁を併記した同音例「鳩」の存在である。正音の同音字注「玉」に両者を差す。両声調いずれかでも把握したのかもしれない。なお、中古音の示す頭子音が鼻音であるため、日本漢字音では濁音「ゴク」「ギョク」として受容した。

玉 [徳] 山 [平] サン	(長承本蒙求/014)
泣 [徳] キフ 玉 [徳] [徳*加濁/長承三年墨点]	(長承本蒙求/024)
玉 [徳] [徳*加濁/長承三年墨点] 臺 [平] タイ	(長承本蒙求/060)
玉 [徳] [徳*加濁/長承三年墨点] 閏 [去] ス>・シキヾ	(長承本蒙求/093)
種 ショウ 玉 [徳] [徳濁*長承三年墨点]	(長承本蒙求/126)
玉 音獄 [入濁] 石之美也/タマ 又音宿	(観智院本類聚名義抄/法中013-3)
獄 音玉 ハ・コク ヒトヤ [上上上] /ウタヘ [平平平]	(観智院本類聚名義抄/佛下本131-2)
鳩 音玉 [入濁・徳濁] コク …	(観智院本類聚名義抄/僧中119-3)

4906a「黒」は徳声を差し、熟字「黒塩 [徳平]」として掲出されている。0596a・0679a・3667a・3671aにも「黒」を見出すが、いずれも入声である。中古音 *xɿk* は曉母清徳韻一等であるから、等韻学上の「清」に対応する徳声であってもよい。しかし、当該字は孤例であり、他の四例が入声であることを考慮すると、疑義が残る。なお、観智院本類聚名義抄には和音「コク [□平]」がある。いわゆる呉音声調においても、高平調〔高高〕の徳声ではなく、低平調〔低低=○○〕の入声であった可能性が高い。

黒 呼得反 クロシ [平平□] /和コク [□平] …	(観智院本類聚名義抄/佛下末053-8)
-----------------------------	----------------------

4913「褌」は単字で徳声を差す。中古音 **pak** は幫母清鐸韻一等であるから、等韻学上の「清」に対応する徳声であってもよい。ただし、当該字と同音「博」の諸例 0758a・0819a・0821a・0822a・0823a・0877a には入声を、0768a・0850a・4774b には入声濁を付す。さらには、4594「罇」0635a「罇」それぞれにも入声を差す。観智院本類聚名義抄の「褌」には正音注「博」を見出し、さらには「博・罇」いずれも入声である。また、長承本蒙求の「博」も入声である。当該字「褌」の徳声には疑義が残る。

褌 音博 ストノキヌノクヒ〔平上□□□〕	(観智院本類聚名義抄／法中145-1)
博 補各〔入〕反 ヒロシ〔平平上〕ノカフ〔上平〕	(観智院本類聚名義抄／佛上082-7)
罇 罇 博託〔入〕二音 …	(観智院本類聚名義抄／僧上112-8)
博〔入〕ハク 望〔去〕サン	(長承本蒙求／005)
朱〔平〕シュ 博〔入〕ハク	(長承本蒙求／009)

5471a「肅」には徳声を差し、熟字「肅慎羽〔徳去上〕」として掲出され、仮名音注「シクシンウ」を右傍に付す。1949b「肅」は入声を差した例で、熟字「懲肅〔平入〕」として掲出され、仮名音注「チヨウシク」を右注に付す。当該字と同音「宿」の諸例 2102b・5614a・5666a には入声を付す。加えて、当該字「肅・肅」と同音の「夙」5589a には徳声を差し、熟字「夙夜〔徳平〕」として掲出され、仮名音注「シクヤ」が左注にある。この「夙夜」については、呉音である法華経音読資料にも見出せるが、漢音読語彙として古くから固定したものであるという指摘¹³⁾がある。長承本蒙求の「宿」には徳声を差していることを傍証として、当該字「肅」は徳声であった蓋然性があると認めたい。

肅 肅 俗正 音宿 … 和シク 主ク ソク	(観智院本類聚名義抄／僧下103-2)
宿 … 息逐反ノ… 又息救反 和シク	(観智院本類聚名義抄／法下054-6)
夙 … 音宿ノアシタ …	(観智院本類聚名義抄／僧下053-1)
宿〔徳〕シク 瘤 リウ〔*平安中期朱点〕リウ	(長承本蒙求／066)

5544b「絶」には徳声を差し、熟字「勝絶〔去徳〕」として掲出される。4380b・6468b・6588a・6683a・6736a・6737a「絶」諸例は入声を差す。当該字の中古音 **dziuat** は從母濁薛韻四等であり、いわゆる漢音の声調では入声と把握していた蓋然性が高い。長承本蒙求の諸例も入声を差している。

絶 自雪反 タユ〔平上〕 タツ〔平上〕 … 和セチ	(観智院本類聚名義抄／法中122-6)
絶〔入〕セツ 絃〔平〕クエ>	(長承本蒙求／030)
絶〔入〕セツ 倒〔去〕タウ	(長承本蒙求／039)
絶〔入〕セツ 纓〔東〕エイ	(長承本蒙求／094)
絶〔入〕セツ 書〔東〕シヨ	(長承本蒙求／131)

5809b「澁」には徳声を差し、熟字「所澁〔平徳〕」として掲出される。日本漢字音における調値は〔低低高高〕と考えられる。一方で、5382a「澁」には入声を差し、熟字「澁金樂〔入東□〕」として掲出されるから、その調値は〔低低高低□□〕であろう。また、当該字「澁」の中古音 **šiep** は精母清藥韻四等であるから、いわゆる漢音の声調では徳声と認められる。これら二例のみでは確実な判断を下せないが、観智院本類聚名義抄を参看すると、当該字「澁」に付載された反切下字「力」について、和音「リフ〔平平〕」を見出すので、入声の可能性はある。

澁 … 色立反 … 和シフ	(観智院本類聚名義抄／法上019-6)
立 力蟄反 和リフ〔平平〕ノワタルノタツ〔平平〕 …	(観智院本類聚名義抄／法上090-1)

5851b「白」には徳声を差し、熟字「周白〔東徳〕」として掲出され、その右傍には「シウハク」を付す。徳声の例は他になく、当該の「白」を含む熟字諸例では入声を差す。0633a・0689a・0723a・0724a・0726a・0730a・0472a・0751a・0770a・0779a・0796a・0817a・0834a・0840a・0890a・0892a・0893・0895a・0898a・6758dの「白」二十例は入声を差しており、仮名音注「ハク」も見出す。いわゆる漢音を入声として把握していた諸例である。その漢音声調においては、中古音が示す頭子音の清濁によって徳声と入声識別される。徳声（入声軽）は「清・次清・清濁」に、入声（入声重）は「濁」に対応する。当該字「白」の中古音**bak**等韻学の術語で言う並母濁陌韻二等であるから、やはり徳声ではなく入声である。なお、中国語音韻史における濁音声母の無声化¹⁴⁾を反映し、日本語の清音で「ハク」と字音を把握する。観智院本類聚名義抄における正音の同音字注にも入声を差している。長承本蒙求も同じく入声であり、証左となる。1403b・6062a・6201a・6241a「白」は入声濁を差し、仮名音注「ヒヤク」を見出す。いわゆる呉音「ビヤク」と認められる。6062a「白檀」には仮名音注「ヒヤクタン俗」を、6201a「色青」には「ヒヤクシヤウ俗」を加えており、その「俗」表示は既に定着して久しい字音の把握と考えられる。

白 音帛〔入〕 シロシ キヨシ マウス … カナフ	(観智院本類聚名義抄／佛中103-5)
帛 音白〔入〕 ハクノキ〔平平平□〕ノヌ	(観智院本類聚名義抄／法中109-5)
舶 音白〔入〕 ックノフネ〔上上上上平〕ノツム	(観智院本類聚名義抄／佛下本001-3)
白〔入〕 ハク 龜〔平*欠損〕クキ	(長承本蒙求／066)
白〔入〕 ハク 眉〔平濁*圈点〕ヒ	(長承本蒙求／143)
白〔入〕 衣〔東〕イ	(長承本蒙求／033)
白〔入〕 馬〔上〕	(長承本蒙求／052)
白〔入〕 起〔上〕	(長承本蒙求／134)
皂〔去〕カウ 白〔入〕	(長承本蒙求／142)

6116a「食」には徳声を差し、熟字「食指〔徳□〕」として掲出され、その右傍には「シヨク」を付す。6306b「食」には入声を差し、熟字「美食〔上入〕」として掲出され、その左注には「ヒシヨク」を付す。いわゆる漢音の声調においては、中古音が示す頭子音の清濁によって徳声と入声識別され、徳声（入声軽）は「清・次清・清濁」に、入声（入声重）は「濁」に対応する。当該字「食」の中古音**dźiek**は等韻学の術語で言う牀母濁職韻三等であるから、徳声ではなく入声を期待する。観智院本類聚名義抄を参照すると、正音の同音字注「音蝕」があり、入声点を差している。長承本蒙求でも入声を差す四例が見つかる。よって、当該字「食」は入声の蓋然性が高いと判断する。なお、中国語音韻史における濁音声母の無声化を反映し、日本漢字音では清音「シヨク」と把握する。一方で、1010b「食」には入声濁を差し、熟字「日食〔入入濁〕」として掲出され、その中注には「ニチシキ」を付す。濁音表示はないが、4672b・4747b「食」は入声を差し、仮名音注「シキ」を見出す。いわゆる呉音を示した諸例である。

食 音蝕〔入〕 和自キ … 又音自 又音異〔去〕人名	(観智院本類聚名義抄／僧上104-5)
蝕 音食 クラフ／ヤフル ムシカフ	(観智院本類聚名義抄／僧上105-8)
蝕 音食 ニコラシテ〔平平濁□平上〕ノツム	(観智院本類聚名義抄／僧下028-3)
廟〔去*加濁〕ヘウ〔*平安中期朱点〕ヘウ 食〔入〕シヨク	(長承本蒙求／033)
進〔去〕シ> 食〔入〕シヨク	(長承本蒙求／081)
食〔入〕シヨク 時〔平〕シ	(長承本蒙求／112)
食〔入〕万〔去〕ハ>	(長承本蒙求／129)

三卷本色葉字類抄下巻の状況を集約すれば、「璧」二例「机・玉・肅・夙」各一例に差された六例を徳声と認定できる。なお、「璧」については保留しておく。

9 まとめ

字書として編纂された色葉字類抄が持つ文献の特徴から見て、その掲出字は規範的な声調を示すという差声の方針があったはずである。この点については、すでに指摘¹⁵⁾がある。つまり、規範的な単字の声調を示すことを目的としていた可能性がある。一方で、疊字門の下位区分である仏法部は呉音をもって、仮名音注や声点を付したという分析¹⁶⁾もある。ただし、徳声を差した当該の諸例については、この区分に該当するものがない。

これらを踏まえて、前田本に見出す徳声の分析を試みた。基本的には、いわゆる漢音の声調を示しているが、果たして六声体系に基づくものかどうかは判然としない。規範的な声調表示を基本としながらも、徳声を含む熟字それぞれが常用的な音読に基づいて差声された可能性が残されているからである。前田本上下巻で認定した徳声の十一例について、個々の熟字に関わる出典や用例を分析しなければならないが、今回は規定された紙幅の都合で割愛した。次稿に期したい。

[注]

1) 次の複製を参照した。

『尊経閣蔵三卷本色葉字類抄』(勉誠社、1984年)

2) 節用文字などをも含む世俗字類抄や色葉字類抄などの諸本を総称して字類抄諸本とする。単に字類抄と称する文献はない。平安時代末期において常用する基本的な語彙としての和名を蒐集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って成立した。いわゆる「色葉和名」とも言える体裁である。この「色葉和名」は原撰本系諸本と想定できる初期段階の書名にもなっていたらしい。現存する字類抄諸本を示しておく。

【原形本】

[イ] 川瀬一馬蔵本

▶鎌倉時代初期の書写になると推定する零本。原形本と認定できるかは不明。

【節用文字】

[ロ] 石川武美記念図書館蔵本(成資堂文庫旧蔵)

▶二卷本色葉字類抄を平安時代末期か鎌倉時代初期に書写したともいわれる零本。

【二卷本世俗字類抄】

[ハ] 天理図書館蔵本(松平定信旧蔵)

▶江戸時代中期以降の書写か。

[ニ] 黒川家蔵本

▶元治元年晩夏中旬に黒川春村が書写。

[ホ] 川瀬一馬蔵本

▶黒川家蔵本[ニ]の手写本。

[ヘ] 東京大学文学部国語研究室蔵本

▶奥書のない黒川家旧蔵本であり、黒川家蔵本[ニ]とは別的一本。

【三卷本世俗字類抄】

[ト] 水戸彰考館本

▶永正十二年の書写本。戦災で消失したという。これは、[ヘ] 東京大学文学部国語研究室蔵二卷本の表裏に附箋があり、「文学博士橋本進吉云世俗字類抄三卷水戸彰考館ニアリ永正ノ寫本ニシテ順識トアリ」による。

【七卷本世俗字類抄】

[チ] 尊経閣文庫蔵本

▶巻三を欠く六冊本。

【二卷本色葉字類抄】

[リ] 尊経閣文庫蔵本

▶正和四年と応永三十年との二度に渡る伝写を経て、永禄八年に書写。

【三卷本色葉字類抄】

[ヌ] 尊経閣文庫蔵本

▶院政期末あるいは鎌倉初期の書写ともいうが、確かではない。中巻と下巻の一部を欠く。

[ル] 黒川家蔵本

▶江戸中期の書写か。

3) 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、1982年) 493頁08-09行

4) 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、1982年) 497頁09-15行

5) 小倉肇『続・日本呉音の研究』(和泉書院、2014年) 研究編第1部562頁21-26行

6) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(武蔵野書院、1986年) 52頁01行から52頁15行を集約した。

7) 小倉肇『続・日本呉音の研究』(和泉書院、2014年) 研究編第1部548頁27-28行

8) 情報機器における日本語表示の規格としては、2004JIS (JIS X 0213 : 2004) が策定され11,223文字が規定されているが、これで表示できない漢字は当然存在する。いわゆるJIS外漢字表示方法については、以下の論文に准拠した。部首や諧声符など、漢字の字形パーツを+記号を使って組み合わせる方法である。当該の漢字には下線を施してある。例えば、「疒+呆」「疒+未」のように表示する。ただし、情報処理推進機構 (IPA : Information-technology Promotion Agency, Japan) が作成した「IPAmj明朝フォント」(Ver.005.01 : 2018年01月) を使うことで、約六万字の表示や印刷が可能となる。

・二戸麻砂彦「パソコンにおける漢字処理/試論」(山梨県立女子短期大学紀要28、pp.09-18、1995年)

・文字情報基盤整備事業 (<https://mojikiban.ipa.go.jp/1300.html>) 独立行政法人情報処理推進機構、2018年)

9) 中古音については三根谷説の推定音によった。

・三根谷徹「中古音の韻母の体系—切韻の性格—」(言語研究、31号、1956年)

・三根谷徹『越南漢字音の研究』(東洋文庫、1972年)

・三根谷徹「唐代の標準音について」(東洋学報、57巻1・2号、1976年)

・三根谷徹『中古漢語と越南漢字音の研究』(汲古書院、1992年/1972年の再録を含む)

10) 次の複製と文献を参照した。

・正宗敦夫編『類聚名義抄第一・二巻』(風間書房、1975年)

・天理図書館善本叢書『類聚名義抄観智院本』和書之部32-34 (八木書店、1977年)

・新天理図書館善本叢書『類聚名義抄観智院本』09-10 (八木書店、2018年)

* 本稿執筆時点では佛・法の二冊が公刊されている。

・宮内庁書陵部蔵『図書寮本類聚名義抄』本文編・解説索引編 (勉誠社、1976年)

・沼本克明『観智院本類聚名義抄和音分韻表』(鎌倉時代語研究3、1980年)

11) 当該字に声点を差していないことを示すため、□を補う。

12) 次の複製・模写および文献を参照した。

築島裕編『長承本蒙求』(汲古書院、1990年)

* 本稿の用例は上記の複製と模写を参照して掲げたが、蒙求諸本については下記の文献も重要である。

佐々木勇『日本漢音の研究』資料篇『蒙求』十本分紐分韻表 (汲古書院、2009年)

13) 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、1982年) 434頁18-19行

14) 中国語音韻史上において、切韻系韻書に代表される中古音 Ancient Chinese の音韻体系が唐代中期には相当の変貌をとげる。その顕著な音変化の一つとして、濁音声母の無声音化現象がある。次の文献に詳しい。

・中国文化叢書1『言語』(大修館書店、1967年) 所収、II-3「中古漢語の音韻」(平山久雄) 161頁08-15行

15) 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、1982年) 531頁08-11行

* 当該部分には注7 (535頁17-18) が付されている。ここに引用し掲げる。

「本稿で「色葉字類抄」を主資料の一つとして挙げなかったのは、正にこの理由に依るのであって、色葉字類抄の掲出字には要するに規範的な観点から声点が打たれているのであって、当時の生の姿を必ずしも伝えていないと考えられるのである。」

16) 藤本灯『『色葉字類抄』の研究』(勉誠社、2016年) 465-550頁

* 第五章の「国語資料としての『色葉字類抄』」を参照。なお、仏法部語彙226語を掲出している中で、入声軽と認定した「12忍辱 [平入軽] シノヒハツ/ニンニク/僧侶分/又慈悲分」(ニ前田上40オ) を見出すが、これは入声と認定すべきであろう。手書きの「辱」が縦長になるため、下部「寸」の右下よりやや上に差声したと思われる。